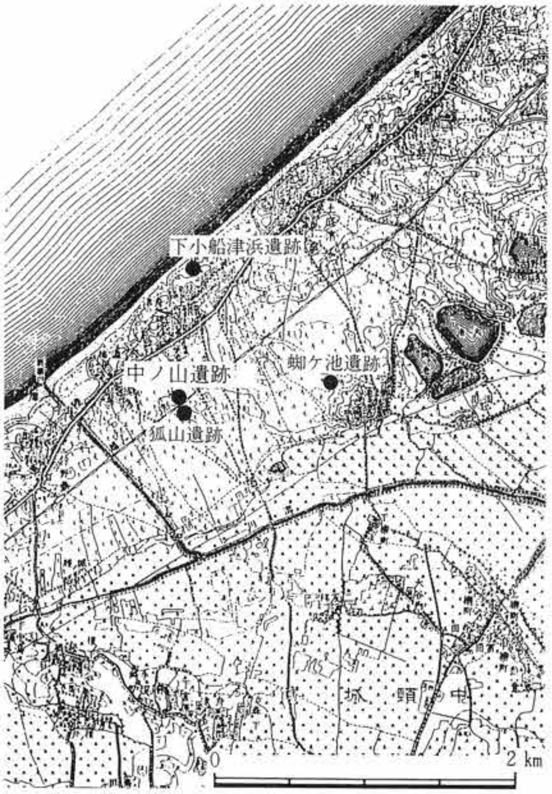
# 中頸城郡大潟町下小船津浜遺跡の中世銭貨

石川智紀・小池義人

## 1　は　じ　め　に

潟町砂丘一帯はかつて才浜と総称された地域であり、海岸沿いには、連鎖状の堤を持つ集落跡が連続して存在している（第2図)。この堤は、冬期の季節風に備えながら、海浜に生活の基礎を置いていた人々の歴史を鮮明に語る遺構である。県道犀潟・柿崎線沿線に存在する現在の集落は、海岸至近から漸次南に移動しながら形成されたもので、連鎖状堤の集落跡は現集落にほぼ対応する旧集落である。砂丘後背地の排水を主眼として繰り返された近世の新田開発は、日本海に注ぐ潟川・新堀川の整備によって1830年代に大成して、才浜の生活の比重は海から水田へと大きく移行し、太平洋戦争後もしばらく浜で製塩が行われていたが、現在は一部の漁業従事者を除いて、集落の生産活動は海浜と完全に分離している。近世、製塩・漁業の生産物は、北国街道の宿場を経由し、あるいは飯山街道（富倉街道）や関田山地を越える脇道を直接に信州方面へ供給された。

慶長2年に作成された「越後国郡絵図」（米沢上杉家所蔵)には、現大潟町域のそれと対比できる13




第1図　遺跡の位置　大日本帝国陸地測量部 明治43年測図・大正3年発行 25,000分の1原図

第2図　潟町砂丘の連鎖堤集落跡（1947年9月米軍撮影）

集落（四屋浜村・行ノ浜村・おかふ山村・志ふ柿村・上小船渡村・下小船渡村・上土底浜村・下土底浜村・くとの町・九頭はま・雁子はま・長崎村・内雁子村）が記載されており、才浜の集落群が中世末期すでに定着していたことはほぼ明らかである。連鎖堤のある旧下小船津浜集落は、同絵図中の「下小船渡村」に重複すると思われるが、堤の構築時期は不明である。以下に記述する中世銭貨が、中世下小船渡村集落に直接関係するものか不明ではあるが、南方約800ｍに位置する中ノ山遺跡〔小池・土橋ほか1995〕等と相まって、集落の形成時期や経済活動の一端を示すと思われる。

第３図　1963年当時の下小船津浜遺跡

## 2　下小船津浜遺跡の概要と中世銭貨の採集状況

下小船津浜遺跡は、縄文時代前期・古代平安期・中世以降の遺物が採集される複合遺跡であり、遺物は汀線直前の新砂丘砂層浸蝕崖で採集されている〔小池1992〕。しかし、現在は海岸の浸蝕に対応した護岸工事がなされ、崖面の上部のみが露出した状況となっている。新砂丘砂層は縄文時代後期以前形成のⅠと、鎌倉時代以降形成のⅡからなるが〔高田平原団体研究グループ1980〕、縄文土器は崖面では採集されておらず、下小船津浜遺跡の浸蝕崖はおそらく新砂丘砂層Ⅰのみの堆積と思われる。したがって、1963年採集の完形深鉢は現海水準以下に堆積する砂層から洗い出されたものであろう。

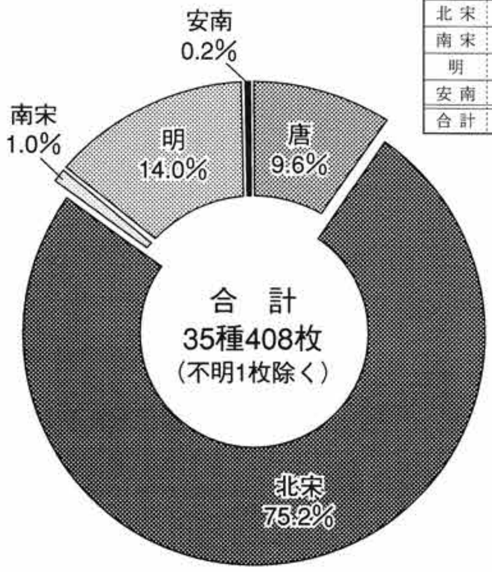
中世銭貨は、最高約７ｍの高さを測る崖面の中位で、1974年春に小池が採集したものであり、ここに報告する407枚のほかに、友人に譲った十数点の銭貨がある。銭貨は銹着したいくつかのサシと若干のバラ状態のものが約30㎝ほどの範囲で集中して発見されたが、容器に相当するものは見られなかった。なお、サシ状態のものは、その当時すべて剥離したので、現在その構成単位は復元し得ない。

## 3　出土銭貨の構成と考察

下小船津浜遺跡より採集された銭貨は全て分離されていたため、一括して分類を行うことにした。現在409枚あり、第１表に示すとおりにすべて渡来銭によって構成されている。銭貨の状態は比較的良好で、銭面が摩滅しているものや銹着の著しいものもあるが、そのほとんどの銭銘が肉眼により判読できた。また銹着の著しいものについてはＸ線の透過を行い、銭面摩滅の１枚を除いた408枚についてその銭種・書体の分類が可能となった。その中には私鋳銭・模鋳銭なども含まれる可能性があるが、それらの判別はできなかった。

銭種は35種認められた。鋳造国別に比率を見ると、唐銭が２種39枚9.6％、北宋銭が26種307枚75.2％、

| 鋳造国 | 数量 |
|---|---|
| 唐 | 39 |
| 北宋 | 307 |
| 南宋 | 4 |
| 明 | 57 |
| 安南 | 1 |
| 合計 | 408 |




第４図　鋳造国別銭貨の比率

| 銭　銘 | 鋳造国 | 初鋳年 | 楷書 | 分楷 | 真書 | 行書 | 篆書 | 草書 | 隷書 | 合計 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 開元通寶 | 唐 | 621 | 37 | | | | | | | 37 | 「背上月」8 |
| 乹元重寶 | 唐 | 758 | 2 | | | | | | | 2 | 当+銭・「背上月」1 |
| 宋通元寶 | 北宋 | 960 | 1 | | | | | | | 1 | |
| 太平通寶 | 北宋 | 976 | 3 | | | | | | | 3 | |
| 淳化元寶 | 北宋 | 990 | | | 0 | 2 | | 0 | | 2 | |
| 至道元寶 | 北宋 | 995 | | | 2 | 3 | | 2 | | 7 | |
| 咸平元寶 | 北宋 | 998 | 2 | | | | | | | 2 | |
| 景徳元寶 | 北宋 | 1004 | 7 | | | | | | | 7 | |
| 祥符元寶 | 北宋 | 1009 | 8 | | | | | | | 8 | |
| 祥符通寶 | 北宋 | 1009 | 2 | | | | | | | 2 | |
| 天禧通寶 | 北宋 | 1017 | 11 | | | | | | | 11 | |
| 天聖元寶 | 北宋 | 1023 | | | 7 | | 9 | | | 16 | |
| 明道元寶 | 北宋 | 1032 | | | 2 | | 0 | | | 2 | |
| 景祐元寶 | 北宋 | 1034 | | | 5 | | 3 | | | 8 | |
| 皇宋通寶 | 北宋 | 1038 | | | 24 | | 20 | | | 44 | |
| 至和元寶 | 北宋 | 1054 | | | 5 | | 5 | | | 10 | |
| 至和通寶 | 北宋 | 1054 | | | 0 | | 2 | | | 2 | |
| 嘉祐元寶 | 北宋 | 1056 | | | 3 | | 1 | | | 4 | |
| 嘉祐通寶 | 北宋 | 1056 | | | 8 | | 4 | | | 12 | |
| 治平元寶 | 北宋 | 1064 | | | 4 | | 5 | | | 9 | |
| 熙寧元寶 | 北宋 | 1068 | | | 22 | | 17 | | | 39 | |
| 元豊通寶 | 北宋 | 1078 | | | | 19 | 18 | | | 37 | |
| 元祐通寶 | 北宋 | 1086 | | | | 16 | 18 | | | 34 | |
| 紹聖元寶 | 北宋 | 1094 | | | | 10 | 5 | | | 15 | |
| 元符通寶 | 北宋 | 1098 | | | | 1 | 3 | | | 4 | |
| 聖宋通寶 | 北宋 | 1101 | | | | 7 | 8 | | | 15 | |
| 政和通寶 | 北宋 | 1111 | | 5 | | | 6 | | | 11 | |
| 宣和通寶 | 北宋 | 1119 | | 1 | | | 1 | | | 2 | |
| 淳熙元寶 | 南宋 | 1174 | | | 2 | | 0 | | | 2 | 「背上月」2 |
| 淳祐元寶 | 南宋 | 1241 | 1 | | | | | | | 1 | 「背七」1 |
| 咸淳元寶 | 南宋 | 1265 | 1 | | | | | | | 1 | 「背二」1 |
| 洪武通寶 | 明 | 1368 | 4 | | | | | | | 4 | |
| 永楽通寶 | 明 | 1408 | 51 | | | | | | | 51 | |
| 宣徳通寶 | 明 | 1433 | 2 | | | | | | | 2 | |
| 天福鎮寶 | 前黎 | 984 | 1 | | | | | | | 1 | 安南銭・「背黎」1 |
| 不　明 | | | | | | | | | | 1 | |
| 合　計 | | | | | | | | | | 409 | |

第1表　出土銭貨の構成

南宋銭が3種4枚1.0%、明銭が3種57枚14.0%、安南（ベトナム）銭が1種1枚0.2%で、北宋銭が最も多く全体の3／4を占めている。ちなみに最古銭は唐の開元通寶（621年初鋳）で、最新銭は明の宣徳通寶（1433年初鋳）である。また安南銭の一種である天福鎮寶（984年初鋳）は渡来銭の中でも出土量が少なく、貴重な資料といえる。

銭種別に出土数量を見た場合では明の永楽通寶（1408年初鋳）が51枚と最も多く、全体でも12.5%と高い比率を示している。次いで皇宋通寶の44枚、熙寧元寶39枚、唐の開元通寶（南唐銭含まず）37枚、元豊通寶37枚、元祐通寶34枚の順で多く、他の銭種が16枚以下を示すのとは大きな開きがある。その内、皇宋通寶・元豊通寶・熙寧元寶の3種は我が国へ渡来した出土量別順位の上位3種であり、特に変わった傾向は見られない。また中世後半における出土銭の量的な面で注目されるものの一つに洪武通寶と永楽通寶の比率があるが、下小船津浜遺跡例では約1：12と圧倒的に永楽通寶の割合が高い。一般的に永楽銭が東国に集中する傾向にあること、特に16世紀以降の備蓄銭において含有率が次第に高くなっていく傾向にあることは鈴木公雄などによって指摘されているが、分類の結果も如実にその傾向を示していると言える。このことから今回の資料は全体の枚数こそ少ないものの、流通過程を色濃く反映していると考えられ、埋納銭ではなく備蓄銭としての性格を考えてみたい。

最後に埋蔵された時期についてであるが、最新銭が明の宣徳通寶であることから考えて15世紀の第3四半期を遡ることはなく、そして永楽通寶の含有率が高いことから、中世において最も銭貨が流通した16世紀代と考えられるであろう。また、一般に大量の備蓄銭が出土した地点の近隣には中世寺院が存在する場合が多く、今後は下小船津浜遺跡の周辺で中世後期に存続した可能性がある寺院の有無、距離的関係、宗派などの検討が必要になってくると思われる。

なお、1・2は小池が、3は石川が記述した。

## 引用・参考文献


小池義人・土橋由理子ほか　1995『中ノ山遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告第69集　新潟県教育委員会・㈶新潟県埋蔵文化財調査事業団

小池義人　1992「新潟県大潟町下小船津浜遺跡採集の土器」『北越考古』第５号　北越考古学研究会

高田平原団体研究グループ　1980「高田平野の第四系とその形成史－新潟県の第四系・そのＸＸⅣ－」『新潟大学教育学部高田分校研究紀要』第25号　新潟大学教育学部高田分校

永井久美男編　1994『中世の出土銭　―出土銭の調査と分類―』兵庫埋蔵銭調査会

鈴木公雄　1994「出土銭貨研究の諸問題(1)」『出土銭貨』第２号　出土銭貨研究会